

学びの創造

★国立大学教育実践研究関連センター協議会の報告

9月20日（金）、本学にて「第83回国立大学教育実践研究関連センター協議会」が開催されました。協議会会長の下村勉氏と四反田学部長の開会挨拶、議事に続き、各大学から活動状況と改組の方向を中心とした現状報告が行われました。多くの大学で、センターが教員養成や学校支援についてますます重要な機能を担う一方で、専任教員の学部への引き上げなど、センターの組織そのものが変化してきていることが印象的でした。午後は、3号館150教室において、附属小学校5年生学級の公開授業が行われました。電子黒板を用いた授業の様子を4方向からビデオカメラで撮影し、その映像を合成した上で隣室の145教室へと映し出す先進的な取り組みです。夜には、センター協議会と同時開催の日本教育工学会参加者も加わり、公開授業に関する教育実践研究ワークショップが催されました。

★教育臨床部門研究会（教育実践セミナー）の報告

センター協議会翌日の21日（土）、国立大学教育実践研究関連センター教育臨床部門研究会が本センターの教育実践セミナーを兼ねる形で開催されました。香川大学の宮前義和先生からは「被虐待児への個別支援を併用させた全校規模の集団社会的スキル訓練」というテーマで、学校現場で集団社会的スキル訓練を実践する際の手続き、声かけの仕方について具体的に解説していただきました。また、福島大学の中野明徳先生からは「東日本大震災と心のレジリエンス」というテーマで、福島県内での被災者の現状と福島大学内うつくしまふくしま未来支援センターの取り組み、風景構成法を用いた心理アセスメントにおける心の回復過程について具体的にお示しいただきました。

今回の企画は、上記の教育実践研究関連センター協議会に合わせて開催されることになり、直前の開催アナウンスであったにもかかわらず学校関係者、臨床心理士など30余名の方が参加されました。来年のこの研究会は、岐阜大学で開催されるセンター協議会と同日開催される予定です。

★第9回全国教育系大学交流人事教員交流研究集会の報告

第9回全国教育系大学交流人事教員交流研究集会が、全国から約30名の会員が参集し、9月19日（木）に中通の明德館ビル2Fカレッジプラザで開催されました。この交流研究集会は、教員養成系大学に在籍する教育委員会等との交流人事教員（現職教員）等が一堂に会し、教員養成、教員研修、調査研究や学外連携等に関する研修、情報交換等を行い、自らの資質向上と教育活動等の充実を図るもので、8年前から実施されています。本年度は国立大学教育実践研究関連センター協議会が秋田大学で開催されることに合わせて、秋田で開催されました。



当日は、山口大学の霜川正幸会長の主催者挨拶に続き、本学の武田篤教育実践研究支援センター長が歓迎の挨拶を述べられました。研究協議に先立って、本県教育行政の大きな特徴である不登校・引きこもり児童生徒のためのフリースクールの空間「スペース・イオ」を見学した後、「学力向上への取り組み」－“変わらない”から“変わる”への挑戦－と題して、秋田県の学校教育の取り組みの軌跡について小野寺清客員教授（元秋田県教育長）から講演がありました。その後研究協議会に入り、山口大学准教授久保田尚先生、香川大学准教授植田和也先生、千葉大学准教授佐瀬一生先生から発表があり、引き続き協議が行われました。特に、教育実習の在り方、教育実践演習の取り組み、教職大学院、交流人事の課題等について熱心に話し合わせ、有意義な会となりました。

★たまご教師の奮闘記② 学校教育課程 発達科学選修 2年 山蔭 麻香

10日間の教育実習は、毎日が勉強であり且つ毎日が充実した楽しい日々でした。実習前は不安でいっぱいでしたが、いざ実際に子どもたちと関わっていると毎日新しい発見があり、それまでの不安は一切なくなりました。子どもたちの1日の生活に関わっていく中で一人一人の特徴や集団の行動としての特徴など、身近にいるからこそ気づけることがたくさんありました。最初の数日間は、1日の実習を終えるとくたくたでした。そこで初めて教師の大変さを自ら実感しました。

この実習期間に算数と国語の2教科を授業させていただきました。反省点はたくさんありましたが、自分で一から授業を作り実際に授業を行うことの達成感や、子どもと共に授業を完成させる嬉しさを実感することができ本当にやって良かったと思うことが出来ました。授業前は緊張でただただ不安でしたが、授業を始めると子どもたちは一生懸命授業に参加し協力してくれ、授業は一人でつくり上げるものではないのだと思いました。

10日間の実習はとてもあっという間で物足りなさを感じる程でした。しかしその短い期間の中でも学ぶことはたくさんありました。今まで教員を目指してきた私は、この実習を通してさらに教師という仕事に魅力を感じ、これまで以上に強く教員を目指そうという気持ちになりました。この10日間の体験を忘れず今後活かしていこうと思います。

★大学院での学びと生活② 大学院教育学研究科 1年 黒木 健

秋田県教育委員会の支援を受け、また勤務校や家族の絶大な協力を得て、現職教員派遣研修（内地留学）として院生生活を送っています。毎日8時には院生室に入り授業や研究の準備をする、こんな毎日が本当に有り難いなと思っています。

今の関心の中心は、生徒や学校と高校美術教育の乖離の問題です。従来、美術教師側からするとそれらの諸問題は自分たちの外側にあるとしてきましたが、私は内側にあるのではないかと考えています。そのことを現状の分析の他に、美術教育史という歴史的視点からも俯瞰しているところです。

それにしても23年ぶりに学舎に戻っての学びの日々はいろいろな汗をかきます。喜びベースの爽快な汗ばかりではありません。知らなかった・・・出来ない・・・という冷や汗も何度もかきました。リーディングリテラシーの無さには自分でも閉口、本を読みながら消えていく記憶力ががっかりし、一つの言葉の意味を確認するのに要領の悪さから1週間、いやひと月。それでもたくさんの先生方にアドバイスをいただき、学生、院生に刺激を受けながら頑張っております。知人からは「自分より若い先生や、学部を卒業するときに生まれてきたような院生との生活はどうなんだい。」と聞かれますが、不思議とそのようなことを思ったこともなく、特にストレートの院生には「さん付け」でお願いしました。年度当初は戸惑いもあった院生も、5月にはスムーズに「黒木さ～ん」です。

そんな中、間もなく前期を終えるレポート提出に取り組んでいる8月中旬に原因不明の体調不良が続き、とうとう夜間救急外来で点滴を打つということがありました。お世話になっているある教授にそのことを伝えると「そうか、黒木君もなったか。現職教員の通過儀礼のようなものだからな。全国どこでも頑張っている人は不思議とそうなるんだよ。」

このことがお世話になっている多くの方への努力の証となれば幸いです。

